

## いかれた人はいただけます

——日本語雑誌・三——

### 敬語談義いつたび

本稿の標題は、現在の日本のどこにもありうる敬語表現、例えば「開店初日にいかれた人は記念品がいただけます」の傍線部を抜きだした形である。これを見本にして日本の敬語について考える。

これまでわたしは敬語について、四回ごくささやかな発言をした。初めは、日本の皇室報道における敬語について論じた「ねじれた敬語の国、ニッポン」（『こべる』八十四号 阿吽社2000）であるが、本稿ではこれに触れない。

次は、ある専門書についての書評における発言である。その書の記述には当惑することが多かった。原因のひとつ

は、敬語「れる／られる」の使い方にあるとしたものである（『国語学』第百九十七集1999 以下、拙稿Ⅱ）。

第三は、論文「日本語練習帳・統紹」（『成城国文学』十九号2003 以下、拙稿Ⅲ）。大野晋『日本語練習帳』（岩波新書）の「敬語の基本」の章にひかれた川端康成『雪国』の「いただく」、『日本国語大辞典』第二版が「いただく」の項で用例とした志賀直哉『痴情』の用例が二つとも誤用だとしたものである。

そして、この連載の前身「言語時評」の五、「ただかせたがる日本人」（『成城文藝』百八十九号2005 以下、拙稿Ⅳ）では、拙稿Ⅲと同じ問題を扱って、誤用の背景や敬

工藤 力 男

語の体系について詳しく論じた。ところが、これも収めた『かなしき日本語』を読んだある人から、同書の廿四篇中もっともわかりにくいという感想が届いた。正鶴を射た感想を寄せてくれる人なので、わたしは深刻に悩んだ。そこで、この忠告に感謝して、本稿では、なるべく既発表の内容と重ならないように注意し、かつわかりやすい記述を心がける。

本稿では、「れる／られる」を簡略にラレル、文語の「る／らる」をラルと書くことがある。紀年は元号を用い、括弧書きのキリスト暦を時に併用する。

# 「これからの敬語」

昭和廿七年四月、第一期国語審議会が文部大臣に建議した「これからの敬語」(以下、「建議」と書く)は十二の項から成る。その「六 動作のことば」は次のとおりである。動詞の敬語法には、およそ三つの型がある。すなわち、

語例	型		
	I	II	III
書く	書かれる	お書きになる	(お書きあそばす)
受ける	受けられる	お受けになる	(お受けあそばす)

第一の「れる」「られる」の型は、受け身の言い方とまぎらわしい欠点はあるが、すべての動詞に規則的につき、かつ簡単でもあるので、むしろ将来性があると認められる。

第二の「お——になる」を「お——になられる」という必要はない。

第三の型は、いわゆるあそばせことばである。これからの平明・簡素な敬語としては、おいおいにすたれる形であろう。

これがすべてである。Ⅲの型を過去のものとなそうとする姿勢は、いかにも時代を感じさせる。敬語法というのは、いわゆる尊敬ばかりで謙讓も丁寧もない。簡略すぎると言うほかない。Ⅰの型が「すべての動詞に規則的につき」というが、「する」「言う」「食う」などにも適用される、とほんとうに考えていたのだろうか。

この「建議」を審議した敬語部会は金田一京助部会長と八人の委員からなるが、文化庁『国語施策百年史』(ぎょうせい2006)によると、部会長以外の委員の提案はない。部会審議と並行するように、金田一は國學院大學の『日本文学論究』七号(1951)に「敬語法上の一つの問題——目

的格への敬語について——」を書いている。全集第三巻でそれを見ると、「敬称」の項に、右のⅠの型を「第一類規則動詞」、「する」「言う」「見る」など十一の動詞を「第二類 不規則動詞」、いわゆる謙讓の類を「第三類 人称目的動詞」と分類している。これに比べると、「建議」は出しがらみなのものである。

拙稿ⅡはⅠの型に関わる。わたしが書評したその著書の晦渋さの原因が広義の文体にあることを述べて、まずこう記した。

読点が少ないうえに長い文の多いこと。それとも関連するが、一文の中に引用を含むと、論述主体の替わればあいがあつて当惑させられること。しかも一人称を一切用いず、その代わりに他者を「(ら)れる」で遇し、加えて受身の述語が多いのだからややこしい。

続けて、学術論文に敬語の使用は控えるべきだが、やむなく尊敬語を用いるとしたら、簡潔さからラレル以外にないことを述べて次のように書いた。

だが、「(ら)れる」の文法的意味は受身が尊敬に優先するのである(だから、これを基本的な尊敬表現とした「これからの敬語」は、戦後の国語政策で最も愚劣

なものだと評者は考えている)。

なぜか、この書評が高島俊男さんの目にとまったらしく、『週刊文春』連載の「お言葉ですが…」の「日本の敬語論」(2006.4.13)のち連合出版『お言葉ですが…第①巻』所収)に、右の条を引いて賛同してくれた。高島さんは次のようにも書いている。

天皇がお酒を召上ったのも「陛下が飲まれた」でよいというわけだ。なんだか天皇がへびに飲まれたみたいだけどね。戦後の口語訳聖書が、この文部省方式を励行して悪評サクサクだったのは、諸賢御記憶の通りだ。

#### 受身と尊敬

拙稿Ⅱの「文法的意味は受身が尊敬に優先する」という記述はわかりにくかったかもしれない。これは、「特に条件がつかないばあい、ラレルはまず受身として解釈される」ということである。このラレルは、日本の学校では助動詞として教えるのが普通だが、この扱いが不適切であることは文法研究者の常識である。最も平易だと思ふ説明を試みよう。

日本語は、いわゆる助動詞をいくつか重ねて表現するこ

とのできる言語である。

花子は薬を飲ま—せ—られ—なかつ—た—だろう。

右の作例の文で、いわゆる助動詞は、使役—受身—否定—過去—推量の順に並んでおり、この順序はほとんど変えることができない。上位の二つ、使役・受身の助動詞は、話し手の判断ならぬ態（ヴォイス）を表わすにすぎない。そこで、これは助動詞というより動詞の語尾の一部だとして、「複語尾」と呼ぶ研究者もある。わたしもその説に賛成である。

「飲ませられ」はちよつと不自然で、一般には「飲ます」による「飲まされ」が用いられる。「飲ませる—飲ます」型の対応は、「泣かせる—泣かす」「浮かせる—浮かす」など多く、二語は同義だといえる。したがって、「す」は動詞の語尾、「せる」は使役の助動詞とする学校文法をよしとせず、「飲ませる」に對する「飲ます」を、「short form」「短縮形」などと称する説があるのは理にかなったことである。これは、使役の表示が動詞語幹に最も近い位置にあることによる現象である。

使役のすぐ下に位置する受身も似たような現象を見せるが、使役に比べると動詞の語幹から一步遠いぶんだけ、語

幹との関係は少し希薄になる。例えば「つかむ」から派生した「つかまれる」と、自動詞「つかまる」とが同義語だとは言いがたい。

日本人は、ラレルの用法を自発・受身・尊敬・可能の四つに分けて考えるのがふつうである。受身と尊敬が続けて用いられるとき、どのような承接順になるかを見よう。

ある会社で、好成績を挙げた課長が社長から誉められる場に立ちあつた部下が、そのことを同輩に「課長、社長にすぐく誉められたよ」と、受身のラレルだけで尊敬語なしに言うことができる。その相手が課長夫人となると、尊敬語（傍線部）を加える必要がある。そこで、「建議」のIの型によると次のようになる。

I 課長が社長にたいそう誉められれました。

これはさすがに変である。そこでIIの型を用いると、まずaのようになる。

II a 課長が社長にたいそうお誉めになりました。

下の「れ」は受身のつもりなのに、「建議」が不要とした尊敬語の重複と解せられてしまう。そこでbを考える。

II b 課長が社長にたいそうお誉められになりました。

これは、尊敬の「お誉めになる」が受身「られ」を挟んだ

異例の日本語である。

残る方法は「建議」にはなかった型である。

課長が社長にたいそう誉められなさいました。

受身の「られ」が尊敬「なさる」の上にあるのは、受身が優先される日本語構文の原則に従ったものである。少しどころなく感ぜられるのは、現代日本語では、受身と尊敬の表現が一文節中に存することがあまり一般的でないからに過ぎない。

古典語では受身―尊敬の承接ができた。その一例を源氏物語・葵の巻からあげる。

（春宮が）まづ恋しう思ひ出でられさせ給ふに、

若君の目もとの美しさが春宮によく似ているので、源氏にはまず春宮が思い出されるといふくだりである。谷崎潤一郎の現代語訳に「急に恋しく思い出され給うて」と、半ば古語ふうになっているのは、やむをえなかったのである。

松下大三郎『標準日本口語法』（1930）の「被動の動助辞」条には左記のようにある。

「……れる」「……られる」「<sup>た</sup>為れる」は被動を表すが第一義であつて、主体尊敬になるのは第二義である。これは卑見と同じこと、日本語の研究者にとっては常識だ

と思うのだが。

「建議」は国語審議会独自の判断でなされ、内閣告示になったわけでもないのに、お上の言うことに従順な組織や報道機関は第一の型を採用した。最も簡便だからである。かくて「ラレル」が幅を利かせて六十年、もはや誰も変だとは思わないようである。だが、敬語とは、言葉を惜まない心の表明だとも言えるのだから、「建議」は第二の型「お——になる」をこそ基本とすべきであつたのだ。高島さんは、前引書に収めた「キリスト教周辺のレベル」の項で、拙稿Ⅱを再度ひいて次のように書いている。

「〇〇は言われた」は、たとえば「ヤーイ、弱虫」と言われた、のほろが優先するのだ。それを、神さまの言動もイエスの言動も全部「言われた」式、「れる・られる」をくつつけて尊敬表現してあるのはいかにも感覚がにぶい。

昨年までわたしのかかりつけだった眼科の女医は、わたしが診察室に入ると、「こちらにかけられてください」と椅子を指さすのだった。患者に二重の尊敬語を使ってくれたのだが、坐りごちのいいはずがなかった。

## ラレルの来歴

土屋信一さんによると、東京共通語ではラレルによる尊敬表現の発達が著しいが、江戸時代末期の滑稽本『浮世風呂』『浮世床』にはごくわずかな用例しかない。そこで、ラレルはどこかで細々と着実に使われ、それが東京語に続いたに違いないという「妄想」を抱いているのだという（『江戸・東京語研究―共通語への道』勉誠出版2009 初出1974）。江戸時代の実態と明治期以後に共通語として隆盛になった事実との落差は、それほど大きいのである。

右の二つの滑稽本でラレルが見えるのは、医者の話、僧侶の言葉の引用、儒者の口まね、隠居、上方者などの言葉である。これは、武士・隠居・芝居者・漢学書生といった人たちの文語的な話し言葉に用いられている、とする従来の説と大差がないという。さらに土屋さんは、江戸時代後期の講述資料ではラレルが最も一般的な敬語として用いられていたとする先行研究を紹介している。

江戸時代後期、江戸の庶民の言語生活で尊敬語ラレルの使用が一般的ではなく、それを用いるのはある程度の知識を有する層であつたらしい。かかる実態の要因について、わたしは次のように推測する。知識層が日常生活で読み書

きする文章は候文であつた。候文では、ラルが「被」の字で書かれたことはよく知られている。ここに実例はあげないが、「被」が頻繁に現れる候文でラルに慣れていた彼らが、話し言葉にもそれ用いることは十分に考えられる。それが明治期の文語文に流れこんでいったのだろう。

〔建議〕が審議されたとき、少なくとも日本語史や古典文学の研究者には、不審に感ずる人が多かったに違いない。高校生とても古典の時間に、「る／らる」は優勢な尊敬語ではないと教わつたはずである。だから、国語審議会でその点が議論にならなかつたとしたら不思議なことである。森野宗明さんは、「敬語使用の諸相」（『言語生活』百十五号 1964）の終節で疑義を呈している。それを左に要約する。

ラルが用い始められたのは平安時代に入ってからであるが、この時代は一貫して低い段階の敬語であり、それより高い他の敬語に隠れた存在であつた。それは近年の小説でも同様で、同輩以下の相手に用いたり、自分の夫に侮蔑を抱いているところに用いたりしている。次第に枯渇して会話から姿を消しつつあるので、これが「お——になる」などにとつて替わることはまず望めないだろう。

森野さんが言うように、尊敬語としてのラレは院政期から鎌倉時代に発達したが、ポルトガル人宣教師ロドリゲスの『日本大文典』（1604～08）によると、室町時代末には最も低い程度の敬語であった。『日本語文法大辞典』（明治書院2000）で、鈴木英夫さん執筆の「れる」の項を見ると、明治以降、次第に受身に収斂してきて現在ほとんど受身を表わし、可能は可能動詞などに、自発は心情動詞に限られ、尊敬は敬意の軽いばあい用いるが、一般的には「お——になる」や特別の敬語動詞を使うのが普通だとしたうえで、「受身を表すという方向に進んでいるように思われる。」と結んでいる。鈴木さんの記述は、実態のうえに自身の期待も含むように思われるが、そう書きたい気もちはよくわかる。

近代日本語の特徴の一つは機能負担の分化、すなわち一つの語形式が多くの意味を担うことをやめて、少しずつ分担し合うことである。理想的に進んでいたラレにおける機能の分担傾向に対して、「建議」は反対側に舵を切ったのである。

## ラレルの復活

ラレは前節に見たような来歴の語なのに、戦後の国語政策でなぜ復活したのか。そこに働いたのは、先行するもう一つの政策であった、とわたしは考える。

口語文が一般化する明治後期から大正初期にかけて口語文典が盛んに刊行された。第三期の国定国語読本が用いられる二年前の大正五年には、臨時国語調査委員会編の『口語法』が出た。同書の「敬讓の助動詞」条から動詞の例文をひく。

先生のいわれる通り、もう来られる頃だ。

確かにラレが挙がっている。本書は、主として東京の教育ある人々の用いる口語を標準とし、地方において広く行われるものを広く斟酌して案定したものだというのが。

この『口語法』の二年後に刊行された春日政治『尋常小学読本の語法研究』は、既刊分、第三期国定小学読本の巻四までの本文について、注意すべき点を記述したものである。その「助動詞」の「崇敬」条には次のように書いてある。

文語の崇敬には受身可能と同じ形がある。今主として関西地方に用いられるレ・ラレが是である。しかし崇敬助動詞としてのレ・ラレは、読本巻四まで

には出て居ない。つまり関西形は避けたものと見える。そして、敬讓動詞条の「複合動詞としての敬讓語」に「敬語＋ナサル」として挙げた実例は左記の四つである。

オ。ア。ガ。リ。ナ。サ。イ。(二ノ六十)

お。の。り。な。さ。い。(三ノ四十一)

お。あ。け。な。さ。い。ま。す。(三ノ四十五)

ゴ。ラ。ン。ナ。サ。イ。(二ノ三)

四例のうちの三つが現在まで続く命令表現「なさい」であるが、それほど「なさる」が優勢であったのだ。

春日政治の著書以後に出た巻六の第二十六には、「伊勢参宮に立たれました」「見物してから帰られるさうです」も見えるが、臨時国語調査委員会の方針と、実例に基づく記述との隔たりがあらわである。かくて、教科書の文章の実例に基づく春日の記述は、前節に見た土屋さんなどの指摘に照応するのである。

松村明『増補江戸語東京語の研究』(東京堂出版1998年初出1996)は、その『口語法』に掲げる言い方のうち、実

際の東京語にはないものに言及している。その中に、東京では本来「れる」「られる」による敬語があまり用いられない、という指摘がある。これは、近代語の研究者の指摘

として、右に土屋さんの発言をあげたところである。

臨時国語調査委員会は、東京の口語を基本に言いながら、文語表現に由来して関西の口語に優勢な語法ラルを優先させた。国語審議会は三十数年後にそれを踏襲した。わたしはそのように解釈している。室町時代以来、衰滅に向かっていた敬語のラルに、大正五年と昭和廿七年、強力なカンフル剤を打って延命を図ったのである。

いかれぼんち

もとより俗語あるいは隠語にすぎないが、特に男性のあいだで「あの子にいかれてる」「いかれたやつだ」などと、自嘲や軽侮の意をこめて用いる語「いかれる」がある。辞書に載る「いかれぼんち」のボンチは「ぼん(坊)ち」の音転と解するのが一般で、『警察隠語類集』には、ボンチを女性に変えた「いかれめんち」も載っているという(木村義之・小出美河子編『隠語大辞典』皓星社2000)。方言辞典には名詞「いかれ」もある。

これらに見える「いかれる」は何なのだろうか。ひとつたび広がった俗語の由来は、その発生場に立ち会った者でなくてはわからぬことが多く、これもそうした語の一つで



ある。だが近年は、『新明解国語辞典』『大辞林』『明鏡国語辞典』など、その由来を断定的に書く辞書も登場している。『大辞泉』（小学館1995）もその一つで、「行かれる」の意からと明記する。この辞書は、助動詞「れる」の項の④に「軽い尊敬の意を表す」として、例文「先生も行かれたそうですね」を掲げるのだが。

もと「行かれる」の意か、とする『日本国語大辞典』第二版から語義記述の二条をひく。

①してやられる。先手を打たれる。〔日本隠語集（1892）〕

④頭の働き、考え方などがまともでなくなる。腑抜けになる。〔隠語全集（1952）〕

大きな辞典によると百年ほど前の用例が最も古い。だが、『日本方言大辞典』（小学館1989）を見ると、発生はさらに古く、意味の幅も広い。中部日本以西に分布して東日本には及ばなかったらしく、「してやられる」の意として滋賀県から鹿児島県までの方言集をあげている。出典は熊本県の例だけが江戸時代末に成った『浜荻』である。

とまれ、方言色・隠語色の濃い語なので、よほど注意しなくては使えないはずである。だから、面と向かって「先

生も行かれましたか」と真顔で尋ねられると、敬語で遇してくれるのはうれしいけれど、まだ行かれていないつもりわたしは、どうにも落ち着かない。

「ただけです」はただけない

拙稿ⅢとⅣでは「ただく」の誤用を論じた。Ⅳには、いま使われている「ただく」は、「おおよそ誤用が七割、的確な使用が一割、その他が境界域にあると言えるだろう」と書いた。七割は大きすぎたかも知れぬが、注意を喚起するにはこれくらい書かなくては。とにかく「ただく」による表現の大半、テレビやラジオで毎日きく、「メールでもお寄せいただけます」「ようこそお越しいただきました」「聴いていただいていますか」など、自分を敬う表現が氾濫しているのである。話し手側が「もらう」、その謙讓表現が「ただく」、相手側が「くれる」、その尊敬表現が「くださる」、それだけのこと、極めて単純な原理だ、というのがわたしの考えである。

「もらう」「くれる」そして「やる」の補助動詞用法が文献に見えるのは室町時代からだという。これは、古代語から近代語への変化に対応することで、古代敬語の単純化を

補うように発達したと解釈できるとは、宮地裕さんの卓論である（『受給表現補助動詞「やる・くれる・もらう」発達の意味について」『鈴木知太郎博士古稀記念国文学論攷』櫻楓社1975）。源氏物語の原文と現代語訳との対比にそれが鮮やかに見て取れる。敬語表現の単純化と引きかえに日本人はこれを引きうけ、「くれる」「もらう」「やる」によって常に恩恵の有無を意識した言語表現をせざるを得ないことになったのだという。

日本人の言語生活に缺くことのできないこの「受給関係」の表現は、外国人が日本語学習に際して最も苦勞する項目の一つである。しかし、日本人がこれを難しいと言ったら、わたしは「待て」と言いたい。食事の前に「いただきます」と唱える麗しい言語習慣、贈物などを辞する「とてもいただけません」という表現があるではないか。ほかならぬ己れの行為について言う「いただく」を、他人の行為に用いるのは言語道断である。

はたから見ると一つの行為に過ぎなくても、それへの関わりかたで表現が異なる。「読む」を例にして言うと、尊敬の「お読みになる」「読んでくださる」、謙讓の「読んでいただく」が基本の型である。この三つの表現価値を等価

と考えているような実例にも多く出会う。そこで、書道部の学生とその顧問の先生が、美術館に書蹟展を見に来た場面です。先生が言うのと想定して、簡単な用例で比べてみよう。

先生は軸の漢詩をすらすらお読みになりました。

これは、先生が学生とは無関係に読んでいる場面にふさわしい。一方、学生には難しそうな作品の前で、学生の耳に入ることを意識して先生が口にしたなら、

先生がそれとなく読んでくださいました。

とても言うだろう。学生は手が出なくて助けを求めたときは次の表現が適切だろう。

難しいので先生に読んでいただきました。

こちらの二つは、恩恵を受けた旨の表現であるが、恩恵の受け方が違うのである。

ちなみに、「読んでくださる」より「読んでいただく」が好まれる理由について、金澤裕之さんは『留学生の日本語は、未来の日本語』（ひつじ書房2008 初出2007）で、「相手となるべく直接的な関わりを持たない形で人間関係を維持してゆきたいというミイイズム的な心理が、無意識のうちに関わっているのではないか」と書いている。

わたしの解釈は拙稿Ⅳに書いた。すなわち、相手を行為

者として取り立てて表現するより、それを受けた者の行為として表現するところに、日本語の敬意表現の要諦があるということである。「先週、あなたはそれを教えたから、私はそれを知っています」という外国人の応答は不自然で、条件句の述語は受け手の行為として、「教われました」あるいは「教えていただきました」と言う方がよいのである。この要諦の過剰適用こそ「いただく」誤用の原因なのではあるまいか。

#### 敬語の転移について

拙稿Ⅳにおいて、テレビの通信販売や料理番組などの「いただく」の用い方は丁寧語に近いことを述べた。その一方で尊敬語として用いる傾向が著しく進んでいることを指摘し、「日本語史において謙讓語が尊敬語に変化した例あることをわたしは知らない。」と書いた。これは不用意な発言であった。その例があったのである。

辻村敏樹「敬語の成立と転移の法則」(「敬語の史的研究」東京堂出版1968 初出1962)はこれに言及した一つである。辻村さんは、「給はる」を「給ふ」の意で用い、現代語で「○○さんがおいでいただきました」という誤用も、

あなたがち誤用とばかり言えなくなるのではないかと許容し、古代語で目下から目上への授与を意味する「たてまつる」が衣服を着たり車や馬に乗ったりする意味の敬称に、「まゐる」が飲食する意の敬称になったことを挙げている。辻村さんの術語「敬称」は一般にいう尊敬語に相当する。

「給ふ」と「給はる」の混同は、拙稿Ⅳで本居宣長の言説を引いて述べたことでもある。これは古事記に登場して以来のもので、ともに「給」を語幹に含むゆえに免れ難いことだった、とわたしは考えている。一方、「たてまつる」「まゐる」の転移の要因について、研究者は意外に淡泊である。例えば『岩波古語辞典』は、「献上する意が、その物を貴人がとり入れ用いる意に広がって尊敬語となる」とするだけである。

管見では、森野宗明「古代の敬語Ⅱ」(大修館書店「講座国語史5」『敬語史』1971)が最も明快で納得できるものであった。森野さんによると、「まゐる」は、飲食行為をあらわに口にすることをはばかった風習を反映した婉曲表現からの流用であり、「たてまつる」は、動作が他者の奉仕を伴うものであることから、客体のがわに即した最高の敬語が生まれた、と解するのである。いずれも平安時代の

習慣に基づいた説明である。

現代語の「いただく」について考えると、「まゐる」のような婉曲表現の線は無理であり、「たてまつる」のように上位者への奉仕が関与することもない。動作の主体と客体とを逆に表現しただけのことで、辻村さんのいう転移の法則は当たらないだろう。

かくて、「いただく」の尊敬語化を辻村さんの「敬語転移の法則」で説明することは難しいと思うが、なお考えなくってはならない。

#### 皇室ラレレ報道

平成十二年十二月に答申した「現代社会における敬語表現」を最後に、国語審議会は活動の幕を閉じた。以後の国語政策は文化審議会国語分科会で議論されている。本稿では、その新しい答申には言及せず、従来の一般的な分類と名称によって書いた。

日本の敬語の難しさは、関与する人間の上下／内外／親疎によって運用の基準が変わりうるからである。だが、本稿で言及したのは、動詞の敬語表現に関する知識に過ぎない。言い誤り・書き誤りでは済まないだろう。新聞・放

送・出版などの言葉は、公表以前に幾段階にも点検されるはずなのに、この実情である。そして、敬語については公表後にも訂正されたことがないと思う。

昨年十二月十九日、ラジオの十九時のニュースは、天皇一家による遊園地「こどもの国」訪問を伝えた。二分たらずの報道の中にラレルが多いのでわたしは呆れた。原稿作成者もそれを読みあげた人も、皇室への精一杯の敬意を示したつもりなのだろうが。

今、朝日と毎日の両新聞は皇室に対して敬語を用いない。新聞報道はこれでいいとわたしは考えるが、放送ではそうはいかないらしい。右のニュースをインターネットで見ると、五百廿余字の十文中、まともな敬語を含む文は「ご覧になり」一つだけ、残りの九つの文はⅠの型のラレルである。受身も二つある。ラレルが耳につく道理である。なぜⅡの型を主にしなかったのだろうか。

まず「子牛の餌やりをされ」が変な日本語である。他動詞にラレルのついた形は特に受身と解釈されやすい。このニュースでは「干し草を与えられ」もそうである。漢語サ変動詞もⅠの型による「訪問され」「参加され」となっているが、これらこそ、金田一論文の「第二類 不規則動

詞」のうち、「する」の普通敬称「うなさる」によるべきだと思う。放送では皇室一家も行かれた人たちなのである。繰り言になるが、秋田市に生まれ育ったわたしは学校で、日本放送協会のアナウンサーのように話すことを理想として教わった。今も放送の言葉が最も気がかりだが、現実には首をかしげることが多い。五年前、早稲田大学名誉教授の秋永一枝さんと話す機会があった。話題がNHKの日本語に及んだとき、ここではどんな教育をしているのだろうか、と尋ねると、嘆きとも怒りともつかぬ言葉が返ってきた、「教育なんかしてないんですよ」と。

(二千年三月)